

おわりに

清水比呂之

考古学とは、実に地味な研究分野である。かつては、きつい・汚い・危険の3Kといわれ、フィールドワークといえば、炎天下、極寒の日々もただひたすら、調査を続ける忍耐の作業である。さらに、地道な室内での実測作業などを通じて発見されたものは輝き、歴史的 position 付けが確認されていく。このような作業を通じ、集大成された成果が博物館という展示の光の中で、存在感を示すのである。膨大な作業、膨大な出土品の中の一握りが、博物館の中で歴史を語る証人となる。

今、注目の田熊石畑遺跡にしても、世界遺産暫定リスト入りの沖ノ島遺跡の調査や周辺の関連遺跡群にしても、多くの人たちによる過酷な作業と歴史にかける思いの結晶である。だから博物館には夢がある。

電子博物館は従来の博物館よりフットワークが軽く、発信された情報は瞬時に世界をかけめぐる。このような、電子的利便性を駆使して「むなかた電子博物館」として語るべきことは次のとおりである。

「むなかた電子博物館」の運営組織は、市民委員の皆さんが中心である。自らの発案で、企画展示の内容を決め、実践活動を通じて、発信を行う。『北斗の水汲み写真展』の実施、『「むなかた電子博物館」研究紀要』の発刊、新着情報のルポなど、熱くて新鮮な思いが届けられる。

さらに、電子的媒体では様々な編集が可能である。時間的な縦糸と空間的な横糸を紡ぎあわせ、分野も考古、歴史、自然など、多面的な切り口で、展開される。今後はそれに合わせ、人のつながりという横糸を加えたい。

発想としては、学芸員のネットワーク、電子博物館友の会などによるコミュニケーションである。独自の切り口で博物館に展示する。そこに主張があり、議論があり、葛藤があるのは当然だろう。

明日の「むなかた電子博物館」は、次世代型の博物館を目指そう。それは進化する展示やコミュニケーションのツールであったり、次の担い手に送り届ける、動的な博物館であり続けたい。

(清水比呂之：「むなかた電子博物館」事務局)